

- 社会科の授業のアイデアを広げたい!
- 具体的な実践例を知りたい!
- 「社会研究ノート」ってどうやって使うの?

そんな先生方のために通信シリーズをスタートします。

記念すべき第1回目は、「社会研究ノート」の著者としてお迎えした
榎原範久先生に社会科教育についてうかがいました。



上越教育大学教職大学院

准教授 榎原 範久 先生

元中学校社会科教師。当時より「研究ノート」を使った『学び合い』による「アクティブ・ラーニング」を過年で実践。「学び合い」の授業実践を公開し、その様子は新聞等¹⁾で紹介されました。

¹⁾ 中日新聞 (2018.2.18 朝刊) : <変革2020>愛知・八幡中、過年で「アクティブ・ラーニング」

Q.1 新学習指導要領実施で、 社会科の授業はどのように変わりますか?

A 2020年度から小学校で新学習指導要領が全面実施されます。年度を追って中学校、高等学校で全面実施されます。

今回の学習指導要領の大きな改訂点の一つは「どのように学ぶか」について直接言及されている点です。それに応じて、社会科の授業も変化させていく必要があります。

例えば、教師の一斉指導の中で知識理解に重点をおき、生徒たちがそれを暗記して正しく再生することを評価の中心とする授業からの脱却です。大切なのは、蓄えた知識を結び付け、他者と協働し、新しい価値を創造していく力です。

従来の知識の習得にかけていた時間を短縮、効率化して、その分、協同的な学習活動を通して、深く思考する時間を確保していく必要があります。

Q.2 中学校の教師時代、 どのような授業を展開されていたのですか?

A 私は、上越教育大学の西川教授が提唱する『学び合い』の考え方や、同大学の水落教授らが提唱する「目標と学習と評価の一体化」の理論を土台として授業を行っていました。

教師が知識理解に関する直接的な教示を控えて、生徒たちの協同的な学びを中心に授業を展開していきます。

具体的な教師の役割と展開は、以下のような流れになります。

- ① 本時の学習目標を具体的に示し、学び合う意義を教師が語る
- ② 学習目標を達成するための学習の手順を説明し、学習を開始
- ③ 教師は机間指導をしながら生徒の学び合いをサポートする
- ④ 生徒が目標達成できたかを、学習目標の内容に基づいて評価

この時に使っていたのが「研究ノート」でした。



▲多様な授業スタイルに合う「研究ノート」

Q.3 「研究ノート」を使い始めた きっかけは何ですか?

A 当時、私が教科担当をしていた学年は7学級あり、3人の社会科教師で担当していました。

それぞれ授業スタイルが異なり、ノートと板書中心の教師、ワークシートで授業をする教師、『学び合い』中心の教師といった感じでした。しかし予算的に家庭学習用の問題集と授業教材の2つ購入する余裕はありませんでした。その状況で、左ページが知識理解中心の問題集、右ページに自由度の高いノートで構成されている「研究ノート」を採用することにしました。

担当教員の間では「研究ノート」は多様な授業スタイルに合うという意見で一致していました。

Q.4 「研究ノート」を使って感じたメリットは何ですか？

A メリットは主に3つ感じていました。

1つ目は、「研究ノート」は家庭学習と授業場面の両方で活用できる教材であることです。予算に限りがある中で、1冊で2つの役割を担うことができました。

2つ目は教科書完全準拠の内容構成ということです。左ページの問題集の内容を見ると、教科書の資料がそのまま活用されていたり、知識理解の問題においても教科書の文章に準拠して作成されたりしています。

3つ目は右ページのノート部分の使い勝手の良さです。ノート形式なので、その自由度の高さに加えて、教師が授業中に示す学習課題を書く欄や、教科書に示されている🌀マークの重要語句の意味を調べるスペースが設定されています。

一方、デメリットとして、ある先生は問題数が他の問題集に比べて少ないことを指摘していました。私はこの点に関してはあまり問題ではないと考えます。問題数が多ければ多いほど生徒たちに学力が身につくわけではありません。1回の授業で問題として抑える内容は20問程度で十分ではないでしょうか。不足であれば、授業中に補うことも可能です。「研究ノート」は教科書完全準拠で問題数を絞っているのです、家庭学習として取り組みやすくなっていると思います。

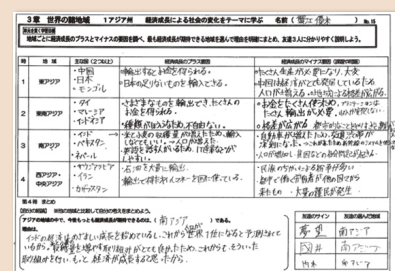


▲「学び合い」の授業風景

Q.5 右側のノート欄をどのように使っていましたか？

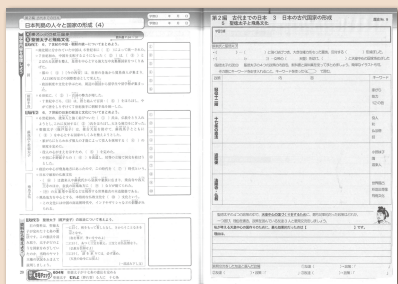
A 私はワークシートを作成して、それを右のノートに添付させる形で授業を行っていました。ワークシートが作成できない時はノートページをそのまま使って、探究的な課題を提示して、生徒たち自身がまとめるという授業もしていました。他の先生は、授業中に左側の問題に取り組む時間をとり、その他に重要な点や思考する問題を板書して、右側のノートを生徒たちが自由に使う形式をとっていました。

いろいろな授業形式に対応できて、汎用性が高いのが「研究ノート」の良さだと思います。



▲生徒のワークシート

Q.6 知識理解の定着はどのようにしていたのですか？



▲ノートページに貼ったワークシート

A 社会科はたくさんの用語を覚える必要がありますが、それは左側の知識理解中心のページが有効でした。私は授業の予習として左側のページを1回取り組むことを家庭学習に設定していました。家庭学習をしない生徒はいました。その中で『学び合い』で授業を進め、家庭学習をやってくる子は教える側に回りやすいですし、自分も社会科の授業で活躍したいという雰囲気学級内で醸成されてくると、家庭学習はかなり定着していきました。

また2020年度版からは新たにデジタル教材が対応するので、用語確認など基礎基本が確実に習得できるようになります。

「研究ノート」を活用して、新しい社会科授業実践のあり方を実現されている様子がわかりました。本日は実践紹介をありがとうございました。



秀学社Webサイトでは「社会研究ノート」の詳細についてご覧いただけます。